

訳10 それを見てある人が言うことに
は、「『かきつばた』という五
文字を各句の頭に置いて旅の思
いを詠め。」と言ったので（男
が）詠んだ（歌）。

訳11 からころも きつつなれにし
つましあれば はるばるきぬる
たびをしぞ思ふ

問一 四句目が「ば」ではなく、
「は」から始まっている。こ
れは「ある人」の指示に違反
しているのではないか。

ア当時、「ゝ」は発明されておらず、
「ば」という文字はなかった。あ
る人の指示も当時の書き方で書け
ば「『かきつばた』という五文字
を各句の頭に置いて旅の思いを詠
め。」になるので、指示に違反し
てはいない。

イ当時、すでに「ゝ」はあり、
「ば」という文字があつたから、
指示に違反したことになる。

訳「からころも きつつなれにし
つましあれば はるばるきぬる
たびをしぞ思ふ

問二 「着つつ」という言葉の前に

置かれている言葉（「唐衣」）を何と呼ぶか。

（注）「着る」という言葉の前に

「唐衣」という語を置くことが伝統的に行われていた。

ア枕詞（まくらことば）

- ・ ある言葉の前に置くことが伝統的に決まっていた言葉（例「奈良」の前に置く枕詞は「あおによし」）。

- ・ 原則五音。

イ序詞（じよことば）

- ・ あとに来る言葉の印象を強めるために置かれるフレーズ。
- ・ どういうフレーズにするかは歌人の自由。
- ・ 原則七音以上。

訳Ⅱからころもきつつつなれにし
つましあればはるばるきぬる
たびをしぞ思ふ

問三 この歌のように、和歌の五・
七・五・七・七の各句のはじ
めに決まった文字を置いて歌
を詠むことを何と言うか。

ア掛詞（かけことば）
イ枕詞（まくらことば）
ウ折句（おりく）
エ縁語（えんご）

訳Ⅱ

からころも

唐衣（Ⅱ着物）を

きつつ「なれ」にし

着ていて

「よれよれになった」慣れ親しんだ」

「つまし「あれ」ば

「すそ妻」が「ある」いる」ので

「はるばる」「き」ぬる

「ピンと張って」はるばる」

「着」来」た

たびをしぞ思ふ

この旅をしみじみ思う

問四 この歌のように、ある言葉

（唐衣）と関係する語（よれ

よれになる・すそ・張る・着る）をちりばめる技巧を何と

言うか。

ア掛詞（かけことば）

イ枕詞（まくらことば）

ウ折句（おりく）

エ縁語（えんご）

訳Ⅱ

からころも

唐衣（Ⅱ着物）を

きつつ「なれ」にし

着ていて

「よれよれになった」慣れ親しんだ」

「つまし「あれ」ば

「すそ妻」が「ある」いる」ので

「はるばる」「き」ぬる

「ピンと張って」はるばる」

「着」来」た

たびをしぞ思ふ

この旅をしみじみ思う

問五

この歌のように、一つの言葉

に二つの意味を持たせる（な

れ・つま・はるばる・き）を

和歌の中にちりばめる技巧を

何と言うか。

ア掛詞（かけことば）

イ枕詞（まくらことば）

ウ折句（おりく）

エ縁語（えんご）

訳Ⅱ

からころも

唐衣（Ⅱ着物）を

きつつ「なれ」にし

着ていて

「よれよれになった」慣れ親しんだ」

「つまし「あれ」ば

「すそ妻」が「ある」いる」ので

「はるばる」「き」ぬる

「ピンと張って」はるばる」

「着」来」た

たびをしぞ思ふ

この旅をしみじみ思う

問六 この歌の正しい説明は？

ア妻への思いをストレートに歌っている。

イまだ旅の序盤で、表だって妻への
思いを歌うわけにもいかず、その
思いを着物の調子をユーモラスに
歌う中に潜めている。

ウまだ旅の序盤で、表だって妻への
思いを歌うわけにもいかず、その
思いを着物の調子を格調高く歌う
中に潜めている。

ここは空白ページです